

二十四節氣と黄經

高田友

(一)

天體の地球より見る位置を知らむが爲に、天に緯度經度を想定し、これを赤緯赤經と呼ぶ。赤緯は天の北極（北極星近邊）を $+90^{\circ}$ 、天の南極を -90° と定む。一方、赤經は、春分の時點に於ける太陽の位置（春分點）を基準點（春分點）と爲す。星座を以て示せば、現在春分點は「魚座」に位置すれど、時とともに移動し、25800年を周期として再び魚座に戻る。

赤緯・赤經はすなはち、地球の中心に光源を置いて、緯度經度を天に投射したるに外ならず。これをしも「赤道座標」とぞ言ふなる。

赤緯は地球の緯度と同じく度と分を以て表示すれど、赤經は春分點を0時0分とし、それより東回り（太陽の進行方向）にて時と分を以て全24時間として計測す。

例を擧ぐれば、シリウスは赤緯 $-16^{\circ}43'$ （天の南半球／天の赤道より南）、赤經6時45分09秒の位置に在り。

(二)

一方、地球より見たる太陽の軌道は「黄道」と名付けられたり。天の赤道は地球の赤道の「延長」といふべけれど、黄道は赤道に比して 23.5° 度傾きてあり。いふに及ばず地軸の傾きに一致す。地軸の傾きは、獨樂が首を振るが如くに徐々に移ろひ行き、いづれの日にか、太陽に向ひて直立するの時も來らむ。而して、25800年を閱して舊に復す。前述春分

點の天を一周するもこの理なり。

かかる「黄道」を基準として、天に、赤緯赤經とは別儀に緯度經度を定めて、これを黄緯黄經と呼ぶ。すなはち「黄道座標」とは是なり。

黄緯は赤緯と同じく北半球は 0° 度より $+90^{\circ}$ 度、南半球は 0° 度より -90° 度として計測するなるも、黄經は赤經とは異なりて、時と分にはあらで、地球の經度と同じ度と分を用ゐて表示す。春分時の太陽の黄道座標を「黄緯 0° 度、黄經 0° 度」として基準と爲すにより、これを「春分點」と稱す。地球の經度とは違ひて東經西經の分別なく、天を一周して、 0° 度より 360° 度に至れば、冬至點の黄經は 270° 度なり。太陽の黄緯の常に 0° 度なるに留意したまへ。

赤道と黄道と混同したまふなかれ。春分時の太陽の位置、すなはち春分点とは、赤道と黄道の交叉する点にして、赤緯0度、赤經0時0分なりと申したれど、之に加へて黄緯0度、黄經0度なるに注意せられよかし。

(三)

偕、舊曆は季節と齟齬あり、同じ六月一日なりとも、新曆に換算すれば早きには六月半ば、遅きに至つては七月半ばあたに該る。かかる舊曆にては古來農事に支障あり。これを是正せむが爲に二十四節氣を作り、百姓ひやうせうをして季節の推移を把握せしめむとはしたりけり。

〈春〉

1. 立春(りっしゅん) 2月4日～18日いんろ
2. 雨水(うすい) 2月19日～3月4日いんろ
3. 啓蟄(けいちつ) 3月5日～19日いんろ
4. 春分(しゅんぶん) 3月20日～4月3日いんろ
5. 清明(せいめい) 4月4日～18日いんろ
6. 穀雨(こくう) 4月19日～5月4日いんろ

〈夏〉

7. 立夏(りつか) 5月5日～19日いんろ
8. 小滿(しやうまん) 5月20日～6月4日いんろ
9. 芒種(ぼうしゆ) 6月5日～20日いんろ
10. 夏至(げし) 6月21日～7月6日いんろ
11. 小暑(しやうしよ) 7月7日～22日いんろ
12. 大暑(たいしよ) 7月23日～8月7日いんろ

〈秋〉

13. 立秋(りつしう) 8月8日～22日いんろ
14. 處暑(しよしよ) 8月23日～9月7日いんろ
15. 白露(はくろ) 9月8日～22日いんろ
16. 秋分(しうぶん) 9月23日～10月7日いんろ
17. 寒露(かんろ) 10月8日～23日いんろ
18. 霜降(さうかう) 10月24日～11月7日いんろ

〈冬〉

19. 立冬(りつとう) 11月8日～21日いんろ
20. 小雪(しやうせつ) 11月22日～12月6日いんろ
21. 大雪(たいせつ) 12月7日～21日いんろ
22. 冬至(とうじ) 12月22日～1月5日いんろ

23. 小寒（しやうかん） 1月6日～19日
24. 大寒（だいかん） 1月20日～2月3日

世に「二十四節氣は中國の氣候に合はせられたれば、本朝の風土には相應しからず」と中傷する者尠すくなからず。さは、無智を露呈したる而已のみ。〔知「knowledge」智「intelligence」久しく唐土の帝都たりし長安・洛陽は、ほぼ東京と緯度を同じくすれば、寒暑のほどは大差なし。大暑大寒の頃ほひは眞に我儕が體感に異ならず。

強ひて言へば、小雪大雪の冬至の前に來たるは怪しう覺ゆるの儀なれど、畢竟難ずるほどの瑕疵にはあらざるべし。

立春とは冬至と春分の中間點の謂ひなり。新曆にては通常二月四日なり。今年（二〇二四）また然りき。

今、敢へて借問せむ。二月四日の何時何分に春分となりしや、と。

君、以て異とな爲したまひそ。

二十四節氣は、古人の思惑（「しわく」と讀むべからず）はさておき、日輪の刻一刻と移動するを捉へ、その轉瞬の時刻一點に立春・雨水・啓蟄なご杯の名を與へたれば、二月四日なる一日二十四時間を立春と稱ふるは天文学より見たるには正鵠を射たりと言ふを得ず。

二〇二四年の立春は二月四日午前十一時四十三分なりき。この時紅鏡しやうやま（the sun）は黃經315度（黃緯は常に0度）、換言すれば春分點より45度を隔てたる位置にあり。45度は360度の8分の1。上記の二十四節氣の表に附したる序列にて、立春は1、春分は4なれば、宜なるかな、その懸隔3にて、24の8分の1に符合せり。

二十四節氣のうち、要たるべき八を「八節」と呼ぶ。「立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至」にして、或いは「二至二分四立」と稱ふるもあり。

斯く二十四を八に縮めて概観すれば、立春より春分まで一年の8分の1なること、火を見るよりも瞭かなり。

(四)

太陽は、地球を廻りて正圓に近き橢圓を描く。

あな。「地球の太陽を廻るにあらざや」と愚昧なる問な發したまひそ。

それがし邊鄙なる山中に居を構へたれば、日ごと日ごとに眼下に擴がる俗塵の世を俯瞰して、太陽の西に沈み行くを見る。若し眞實地球の太陽を廻りてあらましかば、大地怎んが震動せであるべけむ。然るに大地は地震(庭割)にあらざは揺るることなし。地は不動。太陽の地球を廻るは疑ひを挟むの餘地ありとも思ほえず。

基督教を見るにも同様の理あり。「三位一體」といふは、神と子(基督)と精靈は三にして一なりとの義にして、(三位は中國語にて「三人」をいふ)、神と基督は半ば同一人物なりとは知るべし。聖母瑪麗亞(馬利亞)を「神の母」「天主の御母」と讃へまつるは、

基督は神なりとの謂ひなり。正教會にては「生神女(神を生みたる女)」として尊崇す。

基督また神にして且つは人なり。

君、此を以て彼を知るべし。すなはち、太陽は地球を廻り、かつ地球は太陽を廻れるなり。まさしく、量子力學に於て、一つの光子、二つのスリットを同時に通過するを得と同じの「理に合ひたる不可思議」なり。

然則、「太陽このとき春分點に位置す」との定義は過ちなりと異を立つる人、幼兒の如き學を銜ふとの謗りを免れず。

(五)

震旦昔人は時刻を仔細に究明するを得ざりしかば、大要を取りて、冬至と春分の中間點なる日を立春とぞ定めたる。而して、立春に最も近き朔(新月/月なき夜)を元日(舊正月)と定義したりき。

この定義より察せらるるの儀なれど、舊正月(1-22~2-19)と春分(2-3~2-5)のいづれ先せんに來たるは硬貨コインを投げて表裏いづれか出づるに同じく、fity-fityの確率なり。

古歌「年のうちに春は來にけり一年ひとしほせを去年こぞとや言はむ今年とや言はむ(在原元方)〔業平の孫〕」に據りて、「通常は立春は舊正月の後(新年立春)なれどこの年はたまさか先に來たり(年内立春)けむ」と思ふ人多かれど、さは過てるなり。

「別段珍しきにもあらねども今年の立春は年内に來れり」の意に過ぎず。

(六)

まじこ 洵まじこに古への人の智慧侮るべからず。

且つは、舊曆の優れたること、新曆を凌駕して懸隔はる迢かなるものあり。

現代はコンピュータを用ゐて、舊曆新曆の變換極めて手易き世とはなりにけり。

新曆採用は明治六年(一八七三)。奇しくも昨年(二〇二三)にして爾來百五十年けみを閱せり。その不便不合理、何人か託かこたであるべけむ。

今、我が同胞に提言するに、「新曆を廢し、舊曆をして復活せしめよ」との私案を以て

す。《令和六年甲辰きのえたつ舊曆正月元日〔新曆二月十日〕記す》

(令和六年二月二十六日受附)